

朝鮮開国と日清戦争（渡辺 惣樹）の読み方

1. 注意しながら読むべき面白い小説

征韓論～大院君・閔妃の角逐～日清戦争～日韓併合の歴史という、「日本帝国主義があの手この手で韓国を我が物にしてしまう大陰謀ストーリー」と学校で習った記憶(曖昧ですけど)があります。まあ「我が物にしてしまった」ことは事実だけど、「極悪人のように言われなくても」と私などは日ごろから思っていました。なにせあの頃は帝国主義の時代だったから、その時代の眼で見たら、膨張主義は特に罪深いことではなかったのではないかと。併合後にしても、もちろん悪いことは相当にあっただろうが、いくらかはよいこともあっただろうし、総督府にもまじめな善意の人はいたのではないかと。「日帝の大陰謀」というのは単純明快すぎる紙芝居じゃないかと思ったわけです。

さて本書は、たくさんの史料を用いて細かいデータを押さえながら、一連の出来事を面白く、かつ説得性をもって語った本です。一読して「歴史はいろいろな見方があるものだ。一面的なストーリーでは割り切れないなあ」と強い印象を受けました。ネット上での書評を見ても多くの読者から支持を集めています。(例えば <https://www.sankeibiz.jp/smp/econome/news/150328/ecf1503281200001-s.htm>)

本書の長所の第1は面白さ。これは著者の筆力のなせる業だと思います。例えば1876年の江華島条約交渉のくだり。世間では砲艦外交と言われることが多い中、実は黒田清隆が意外(?)に温和な態度で成立にこぎつけたと経緯が描かれています。ディテールを丹念に描写することによって説得力が生まれた好例かと思います。

第2の長所は、**米国史料を参照しながら話を進めるというアイデア**。これにより記述に多面性と説得力が生まれています。普通の人知らないような情報もたくさん紹介され、読者は蒙を啓かれる喜びを味わいます。

第3には、**帝国主義時代の気分・考え方をよくつかんでいる**(と思われる)ことです。今でこそ植民地主義や膨張主義は悪徳とされていますが、それらは当時カッコいいものと受け止められていた。例えば(今日では)悪名高い円明園事件にしても、本書が記すように英仏当事者の感覚としては(おそらく)当然のことだったわけです。「時代の気分・感覚」を持たずに今日の基準で断罪するだけでは、歴史の理解は深まりません。

新鮮な視点あり、面白く、わかりやすい。しかしそれに流されて、素直に納得してしまってよいかは別物です。なにも私は、左っばい通説の肩を持つつもりはありませんが、**本書のわかりやすさには多少の「無理」**があります。本書を楽しむにあたっては、それに注意を払いつつ読み進める必要があることを、以下述べていきたいと思います。

そもそも、あれだけ朝鮮の自主独立を執拗に主張していた日本が、それを併合してしまったという**事実は、周囲・後世から疑われても仕方のないこと**でした。私は春秋時代の楚の巫臣という貴族を連想しました。この人は、夏姫という絶世の美女を娶ろうとした男たちに思いとどまるよう説得したくせに、最後は自分が彼女をさらって亡命してしまったという人物です。

要するに、当時としてはそれなりの(まともな)理由もあっただろうけれど、「日本は全く悪くな

い」と開き直れるかは疑問だと思うのです。ところが著者はそれをやってのけた。つまりこの本のモチーフの中に日本弁護があるのです。それに伴う叙述上の「無理」を次節から見ていきます。

2. 何のための「開国」だったのか？

本書前半部を乱暴に要約すると、開国を求める日本と拒む朝鮮。宗主国として朝鮮を指導したい清国。清国は、朝鮮が米仏に行った「蛮行」の巻き添えを恐れて、表面上は朝鮮を独立国と扱うが、周辺地域の冊封体制が崩壊していく中で朝鮮を再度グリップしようとし、守旧派（事大党）と結ぶ。朝鮮では開化派と守旧派の抗争が絶えず、それに伴う暴動で日本の公使館や民間人も被害を受ける。内乱鎮圧のため援兵した日本は、朝鮮が独立国としてやっていけるよう内政改革を求めるが、朝鮮政府は頑なに拒む。応援団である清国は兵力増援を図るが、遂に朝鮮国王は改革実行とともに清国部隊排除にも同意し、日清両軍の衝突に至る。

本書の叙述はペリー来航から始まります。これを著者は、米国による「日本開国プロジェクト」という壮大な物語における成功場面として描いています。

日本では木戸孝允が、維新成功後の弛んだ空気に活を入れることを目的に「朝鮮開国プロジェクト」を構想します。旧例に則って対馬藩を通じて朝鮮に接触させると、失敬な応対があり、それが征韓論を惹起し……、と多くの人知っているストーリーにつながっていくわけです。

開国は善であり、開国させることも当然善であり、それを拒むのは暗愚だという論理が通底していることが見て取れます。

もちろん開国にも、いわゆる近代国家を作ることにも十分な意義はあり、私自身も「そうでなかった昔に戻りたい」とは思いません。当時の列強側にも、また列強見習い中だった日本にも、それなりの善意があり、実際に朝鮮近代化の手助けもしています。

しかしいやがる相手国に無理強いできるほどの善と言い切れるものなのか？ 武力を用いてまで実行するほどの善なのか？ それは新世界の「発見」に似ています。快挙には違いないにしても現地の先住民にとって「発見される」ことは必ずしも幸せではありませんでした。

著者は米国による日本開国も、実は中国市場に到達するための中継地を確保したいという「自国の利益」が動機だったと、2015年の『文藝春秋 SPECIAL』の座談会で述べています。当然、米国同様に、日本の朝鮮に対する「開国プロジェクト」にも国益という動機があった筈ですが、私の印象では著者はそれに触れていません。「純粋な善意による開国のすすめ」vs「意固地に拒否する暗愚な連中」というストーリーに沿った演出をしているように感じます。

3. 「内政改革」要求の唐突

日清戦争のきっかけについて考えてみたいと思います。

とりあえず1894年2月の東学党の乱から話を始めることにします。5月末の全州落城を受け朝鮮政府は清国に援軍を要請、日本も清国からの通知を受けて出兵を決定します。ところが兵を伴った大島公使がソウルに到着するとほぼ同時に、農民軍は全州を退去、内乱は沈静に向かいます。

目先の問題が解決しつつある以上、あとは撤兵となりそうなものですが、その間にも日本から増援部隊が到着。現地での兵力は清軍を逆転しました。ここで大鳥公使はこのような内乱の再発防止のため内政改革を朝鮮政府に提案します。朝鮮政府はこれを拒否、日本軍の撤兵を要求します。日本側は反発。7月19日清国代表袁世凱が急遽帰国すると、大鳥公使は23日に王宮に乗り込み国王に談判、大院君を担ぎ出し、反日的だった閔氏一族の追放、と清国との冊封関係破棄を認めさせます。25日には豊島沖で両国海軍が衝突。こうして戦争となりました。

本書では大鳥公使の内政改革5か条提案を紹介。今日の眼から見ると、いずれももっともな内容に思われる内容で、読者に日本のまっとうさと、朝鮮政府の頑迷ぶりを感じさせます。この記述を見る限り、「やっぱり日本は悪くなかった」という印象を受けます。

しかし本当に「日本は全面的に白馬の騎士で、善意を遂行する中で戦争に巻き込まれた」と言い切れるものなのか？ たしかに当時の朝鮮政治は褒められたものではなかったようですし、再三申しますが日本側にもそれなりの善意はあった筈です。

にもかかわらず私が本書の記述で不審を感じたのは、「内政改革」という要求をこの段階で持ち出してきた唐突と、「改革という正論を貫徹しようとしたゆえの日本の正しさ」を強調する書きぶりからでした。

繰り返しますが、改革自体は悪いことではありません。でも他国に「ぜひ改革をさせてあげたい」という情熱は、あまりにも奇特でちょっと不自然に感じます。(私は某外為投資会社の「あなたの為だから」というTV広告を連想しました) まして「我が派遣軍の力を背景に」ということだとなおさらです。ふつうはそれを内政干渉というのです。もう1つ付け加えると、それは「開国をさせてあげたい」と相通ずる響きがあります。執着する意義が私には実感できない「隣国の開国」に著者がこだわるのは、「内政改革」問題同様、「善意の国日本」を強調したいという演出につながっているように思えてなりません。

そして本書には書いてないことですが、内政改革を提案することが論ぜられた6月13日閣議後の伊藤首相・清国公使会談で、まずは両国撤兵してから内政改革を協議することが合意されています。それが覆り「日本は撤兵しない」(≒内政改革は我が派遣軍の力を背景に)となるのは、15日の閣議で陸奥外相が強硬論を通したからでした。これに対し清は6月21日、日本に「日本は朝鮮を自主の国と認めているのだから内政に干渉するのはおかしい」としたうえで日清両軍の撤兵を提案しています。(大谷正『日清戦争 近代日本初の対外戦争の実像』)

なぜ強硬論に切り替わったのか？ 太谷本は、日本国内で政府の弱腰を叩く強硬論・対清海戦論が横行し、政府も派兵部隊を「空しく返す」ことが困難になったためだと説きます。また本書(渡辺本)をはじめ、私が見たどの本でも同年5月以前に(現地は別として)日本での内政改革論の記事はありません。

内政改革論は(内容はともかく動機としては)撤兵しないための口実と見るのが自然でしょう。陸奥自身も改革論の動機として、日清両軍の睨み合いを打開すること(「何とか一種の外交上の手段によるにあらざれば、この纏糾紛錯の事局を疎通する能わざるべしと思料」と述べています。露骨に

「撤兵したくないから」とは書いてありませんが、少なくとも「朝鮮のため」に考え出したものでなかったと考えるのが自然だと思います。

4. 甲申事変の取り扱い

甲申事変は1884年に金玉均・朴泳孝ら開化派が親清派を排除しようとして失敗した政変です。

金玉均らは親清派大物を襲撃した後、王宮に入って国王を擁し、日本の竹添公使に護衛を依頼することを進言します。公使は兵を連れて王宮に入り、安堵した国王から謝辞を受けます。クーデター派は翌日新閣僚を発表します。

しかしそのころ外部からの情報で親清派襲撃を知った国王夫妻は動揺し、清軍に救援を要請します。清軍の攻撃を受けた王宮から、竹添公使らは国王夫妻・クーデター派を残し公使館を経て仁川へ脱出。残ったクーデター派は壊滅します。併せて反日暴動も起こり、公使館が破壊されるとともに民間人の死傷者も出ました。

これが事変のあらましです。誰もが疑うのは、**竹添公使は実はクーデターに加担していたのではない**かということでしょう。本書では一言もそれについて述べていません。一方、金玉均らに対してはかなり同情的で、クーデター前の活躍ぶりとともに、親清派大物の閔氏一族の因循ぶりを記述しています。そして開化派がクーデター直前に米国外交関係者に対して計画を漏らし、米側も理解を示したとも。（「あんな連中は殺されて当然」という印象を受けた読者が多いことと思います）

もしそうなら竹添公使は当然計画に肩入れしていた筈です。なぜなら開化派は自分では武力を持たず、しかも行動が失敗したら身の破滅は必至ですから、日本側の助力を確認する必要がありました。まして第三者である米国に計画を漏らす一方で、肝心の日本側に黙っているわけがありません。この**自明のことをなぜ著者は素通りして触れないのか？** なぜ国王から公使への感謝の場面は仔細に描くのか？ なぜ清兵や朝鮮暴徒の蛮行だけを書き連ねるのか？ **著者の作為・印象操作がそこにある**のは明らかだと思います。

印象操作の例をもう1つ。清軍の攻撃直前の竹添公使の判断（国王を連れて済物浦へ避難する案を退けた）の拙劣さを描くくだりで、著者は2つのセンテンスを挿入しています；

竹添は漢文に強く漢詩にも明るい知識人で、支那文化を愛していることで知られていた。

天津領事の経験もあり、李鴻章とも知己であった。

非常に唐突というか、「なぜここでそんなことを語るのか？ だったらどうなんだ？」と言いたくなりませんか？ 「そういういい人を攻撃した清軍はひどい」ということ？ それとも「こんな文弱の人がクーデターに関わっているわけないでしょ」と印象付けたいのかしら？ どちらにしても著者が何か細工をしようとしている気配は感じ取れます。

5. 李鴻章のピエロ扱い

本書では、戦争前の清国の北洋大臣李鴻章を、自国の武威に自信満々で日本を侮っていたと述べています。日本に亡命していた金玉均を上海に誘って始末したのが1894年3月。直後の東学党の乱に伴う朝鮮からの救援要請に李は「満面の笑みを浮かべたに違いない」とまで著者は推測します。

これを好機に兵を進めて挑戦を再び属国としてグリップするのだと。

実際の戦闘では清国は連戦連敗し、話は下関講和会議へと進みます。清国は当初派遣した代表者にまともな全権委任状を持たせることすらできぬ不手際ぶり。そこで李鴻章の出馬となるのですが米国人顧問フォスターの介添えでやっと交渉が成立するものの、皇帝が認めてくれるかオロオロし、北京での報告もフォスターに頼り切りだったと本書は記します。

多くの読者はおそらく李鴻章に、三文芝居のバカ家老のような印象を抱くことでしょう。それに引き立てられるように「善玉」日本の颯爽ぶりを感ずることと思います。

しかしあの切れ者李鴻章がそんなお粗末をやるものなのか、と私などは思います。岡本隆司先生は戦争前の李が自国の武力を信用していなかったといえます。(『李鴻章 東アジアの近代』) 装備は立派でも人材などの面で実力が伴っていないことを感じていたと。また日本との戦争につながる朝鮮派兵についても内乱が鎮静したら引き上げを前提としていた、とも。

ここでも著者は李鴻章の醜態を強調することで日本の印象をよく見せようとしているように私は思います。

6. 「暗黒の連合」問題

著者の資料の取り扱いについての疑問を、本節と次節で論じます。

1884年朝鮮の遣欧米使節団の閔泳翊団長と駐英公使森有礼の会見について、第3章に次のような記述があります。

森は、使節との会談が始まるや否や、「今の朝鮮は独立国ではない」と述べた。彼は、朝鮮が自ら望むかのように清国への従属の道を歩んでいることに我慢がならなかったのである。光線は清国の属国ではないかという現状認識は森だけの特別な感慨ではない。先に述べたようにヤング駐清国公使も同様の理解であった。おそらく森は閔泳翊に対して議論をしかけることで、朝鮮が独立国としての矜持を見せるよう促したかったのであろう。しかし閔泳翊は、「これに憤激」し、森と激しい口論になった。やりとり自体は礼儀正しいものだったと立ち会っていたフォーク（筆者註；朝鮮使節に随行した米国土官）は書き残している。森との会談後に施設は清国公使曾紀沢と会見した。朝鮮の「楽浪郡化」を順調に進めている清国の外交官が嫌味などというはずもなかった。「(閔泳翊にとって) 曾公使との出会いは、短時間ながら、快いもの」であつたらしい。

森は、自らの手で変革を進めず清国に頼りきる朝鮮王朝への憤懣をぶつけた。フォーク少尉は、自身の意見をその場で開陳するようなことはしなかったが、森公使の考えに同意していた。「フォークは、この論争においては傍聴者に徹したが、論争の感想として、『提起したすべての論点において森公使がより妥当である』と考えた」のである。

(金玉均のクーデター・甲申事変 その二 フォーク少尉の朝鮮への失望 より)

このくだりを読んだ人は、「何と朝鮮貴族の愚かで後ろ向きなことよ」、それにひきかえ「日本の前向きな親切心は米国人からも共感されている」と感じたことでしょう。そして、この記述の材料となった参考文献のタイトル「暗黒の連合」から、当時の朝鮮と清国について「愚者と悪者の結託」をイ

メージするのではないかと思います。

ところが「暗黒の連合」の実物（ネットで閲覧可）を読んでみると、上記が著者姜東局先生の論旨とは全くかけはなれたものであることがわかります。

そもそもこの論文は、当初、開化派のリーダーと目された閔泳翊がなぜ欧米訪問の後で保守側に傾いたか、その内面の変化を、訪問中の出来事から読み解こうという問題意識で書かれたものでした。つまり閔泳翊の「反動」化は単に「バカだからそうなった」のではなく、それなりの合理性のあるものだったのではないかという趣旨の論考だったのです。

閔泳翊一行は歴訪の途上で、列強がアジア・アフリカから行った様々な収奪を目にしました。例えば博物館における円明園略奪品の展示、エジプトの貧窮など。論文は閔泳翊がそこから「帝国主義がつくりだした国際関係の犠牲者・犠牲国の悲惨な状況を目撃し、またその原理を理解していた」と評しています。

なるほど、知識という面では開国・近代化は光であるかもしれない。しかし「海外のモデルを導入することが朝鮮には実際の進歩をなかなかもたらさない」という認識が彼を守旧に動かしたのだと姜先生は言います。しかもそれは単なる守旧ではなく、「伝統的なものを立て直すこと」の実現後に「近代的な改革も可能になる」という認識だったと。

閔泳翊は帰国後、米国公使に向かって「私は暗黒に生まれた。光（筆者註 欧米の文明社会）に出ていったが、今はまた暗黒へ帰ってきた」と象徴的な言葉を吐いていますが、姜先生によるとそれは「暗黒＝ダメ」の文脈ではありません。「光は当然、輝かしいものであり、そして、目標にすべきものである。ただし一方で、それは暗黒を照らすことで、暗黒のなかにあるアクターを滅ぼす危険性をもつものでもあった。」と述べています。（私の理解では、強引な近代化の副作用という感じです）

帰国後の閔泳翊が「金玉均の期待と異なり、清との『暗黒の連合』の推進者になっていた」のは、前述の背景があつてのことだとこの論文は述べているのです。「バカだからそうなった」のではない、というのが姜先生の認識なのです。

一方、本書著者渡辺氏は、閔泳翊の豹変を「曾紀沢駐英公使との会談で感じた心地よさこそが、彼の国際感覚だった」と切り捨てています。要するに「遅れた感覚のバカだから」というわけです。もちろん引用元文献の主張を受け売りする必要はありませんが、渡辺氏がこの論文をきちんと理解していたなら、こんな書き方にはならなかったでしょう。どうも氏の引用は、自分の主張の援用に使えるような箇所をつまみ食いらしいことがうかがわれます。

当時の朝鮮はたしかに清国の属国であり、「近代的な意味での独立国」ではありません。しかし自主性が皆無だとは、朝鮮も清国も考えていませんでした。それについて前記『李鴻章 東アジアの近代』には「朝鮮は属国だが、その内政外交は自主」という言葉が出てきます。この「属国自主」という概念と感覚、森には（現代の私たちにも）容易に理解できるものではありませんでした。これでは閔泳翊と議論がかみ合うはずもなく、それは米国人のフォーク少尉にも同じだったでしょう。姜先生は、中国的世界秩序観を持たぬフォーク少尉には「西洋的な教養をもつ森公使がまともな議論を展開しているように聞こえることは当然といえば当然」と評しています。つまり「森が正しく閔泳翊は誤っている」という単純な図式ではないという認識をこの論文は示しているのですが、渡辺氏はそこ

を理解できていないかそのふりをしているわけです。

7. 閔妃暗殺事件

もっとわかりやすいのが 1895 年 10 月に起きた閔妃暗殺事件（乙未事変）です。

著者はこの事件を『親日派のための弁明』（金完燮）を引用しサラッと 1 行で片付けています。

危機に瀕した朝鮮革命を続行させようという改革派の必死の試みであった。

なんだ！ 今まで日本の悪行と聞いていたけれど、単なる朝鮮側の内ゲバじゃないか！

上記一文を読んだ人はそう思うでしょう。実はこの文の前に次の記述があるのですが、著者はそれを伏せています。

朝鮮の革命勢力はこれ（筆者註 内閣から改革派が一扫され親露派だけが残ったこと）をみて閔妃を排除して逆転を試みるべく閔妃の政敵、大院君を引きこんだ。大事をおこすにあたって、大院君は世論の盾となる政治的な役割を、日本は軍事行動を引き受けた。かれらは 1895 年 10 月 8 日未明、腕の立つ日本の浪人と軍人を動員し閔妃を殺害することに成功した。

あらあら！ やっぱり実行犯は日本人だったのか。渡辺氏は**基本的な事実（誰が殺したか）**をわざわざ伏せていたわけです。こういう小細工に気づいてしまった以上、他の記述も怪しいと思っかかる必要があるということです。

もっとも私は、金氏の「改革派黒幕説」にも不自然さを感じています。断言はできませんが、私が黒幕として怪しいと思うのは日本公使館です。ちょっと脱線して、そちらの話を致します。

まずこの事件ではっきりしていることを 3 点書き出しておきましょう。

- 1) 実行部隊は日本人であった。
- 2) 王宮乱入の様子は西洋人に目撃されている。
- 3) 杉村代理公使は自身の関与を認めている。

これらは渡辺氏が参考文献として多用している（同氏と方向性も近い）『きままに歴史資料集』（澤田獏）にも出てくる情報です。なお澤田氏は「大院君黒幕説」「三浦公使潔白説」を唱えています、私はそれもどうかと思っています。

なぜなら第 1 に、現地トップの三浦公使に黙って代理公使が任地の王后殺害のような荒業に手を染めるなど、役人の習性としてほぼありえない話です。（常識論としては、正公使と代理公使のどちらであれ、「公使館が関与した」というだけでとんでもないことではあります）

第 2 に、事件当時大院君は失脚して隠棲中でした。前年 7 月に大鳥公使に担ぎ出されて政権の座にいた筈のこの人が失脚したのは、「内政改革」に消極的で、大鳥の後任井上馨と衝突したのが原因です。それを踏まえると大院君の側から日本に話を持ち掛けるというのは不自然に思えます。実際、事件当夜、大院君を迎えに行った日本側要員によると、彼がすぐに腰をあげず、出馬まで交渉・説得に時間を要したといひます。（そのために襲撃のタイミングが遅れ、目撃者が増えたそうです）

もし大院君が黒幕なら、なぜ決行のその日になって説得に時間を費やす必要があるのでしょうか？ 逆に公使館が大院君を担ぎ出すのは、十分ありうるストーリーだと思ひます。事件の当座だけ「盾」と

なってくれるなら、あとは使い捨てで構わないからです。

澤田氏説はここまでとして、金氏の「改革派黒幕説」の不自然さは上記からもうかがわれます。「改革を邪魔した大院君」を改革派が担ぎ出す、とは考えにくいからです。

8. 人物の描き分け

著者は、開化派や日本人に対しては、内面を積極的に描こうとしています。彼らがいかに国益、あるいは朝鮮への善導に心を砕いていたか、それに対する朝鮮支配層の頑迷に憤っていたかを、熱意をもって描いています。

それにひきかえ、朝鮮側・清国側の人物はどうか？ 多少なりとも踏み込んだ書き方をしているのは李鴻章ぐらいなものです。(その李鴻章にしても5節で述べたようなピエロの扱い) その他は単に頑迷だけの人物として描かれています。

日本側関係者にも一人や二人ぐらいは腹黒い人や狂信的なアブナイ人がいた筈なのに、**登場する開化派と日本人には、一人として嫌な奴が出てきません。守旧派と清国人はその反対です。**

私は『中国の大盗賊』(高島俊男)が小説『李自成』(姚雪垠)を評した言葉を思い出しました。李自成は共産党中国では、革命的英雄にまつりあげられました。そのせいで「とうとう李自成軍は、馬の飼育係りの爺さんにいたるまで、善良で誠実で親しみやすい、百パーセントの“人民の軍隊”になってしまった。」と同書は指摘しています。

高島氏は「それじゃ文学としてダメでしょ」と言っているわけですが、同じことがこの『朝鮮開国と日清戦争』にも言えそうな…。

おっと！ 本書は文学ではなく歴史書を標榜しているのです。

追記)

ここまでの考察で、本書が**一種の勸善懲惡的小説**であることが見えてきたかと思います。

しかし渡辺氏といえば、あの柄谷行人が天下の朝日新聞書評 (<https://book.asahi.com/article/11640416>) で取り上げたほどの人物です。歴史研究の体裁をとりながら、自己の主張を通すための小説を書くなどということがありうるのだろうか？ 多くの人がそう思うことでしょう。

私も以前はそうでした。しかし月刊誌『Will』2021年1月号で「一夜にして”魔法のように消えた”トランプ票」という氏の投稿を読んで考えが変わりました。この人は、元々こういう人だったのだ、と今は思っています。